第５回　プッチーニと『蝶々夫人』
～ 初演はなぜ大失敗したのか？ ～

プッチーニ、ジャコーザ、イッリカの３人
（1895年）

ﾌﾟｯﾁｰﾆ（左）と台本作家ｼﾞｬｺｰｻﾞ（中）
・ｲｯﾘｶ（右）

ﾌﾟｯﾁｰﾆを支援し、彼の作品の多くを出版したﾘｺﾙﾃﾞｨ

今年（2024年）は、天才オペラ作曲家『プッチーニ』の没後100年に当たります。栃木県オペラ協会では、それを記念して６月８日（土）に宇都宮市文化会館小ホールを会場に《没後100年「プッチーニの世界」》と題する公演を予定しています。

当日は２部構成で、第１部では「プッチーニ名曲アラカルト」として、プッチーニのオペラから有名なアリアや重唱等を演奏会形式で、そして、第２部ではオペラ『蝶々夫人』をハイライトで上演致します。

今回は、そのオペラ『蝶々夫人』について特集してみたいと思います。（プッチーニの生涯や人となりについては、**第１回 愛と悲劇の達人「プッチーニ」**に詳しいので、そちらもぜひご覧ください。）

さて、日本の長崎を舞台にして展開されるこのオペラは、プッチーニ作品の中でも人気が高く、今でも日本はもとより世界中で上演され続けています。プッチーニ作品に特有の悲劇的な愛の物語であることは勿論、異国情緒あふれる舞台や音楽など、どこをとっても魅力満載の作品です。

しかしながら、このオペラの初演（１９０４年：ミラノ「スカラ座」）は大失敗であったことをご存知でしょうか？

今回は、その点にスポットをあててみたいと思います。

１　オペラ「蝶々夫人」作曲と初演までの経緯

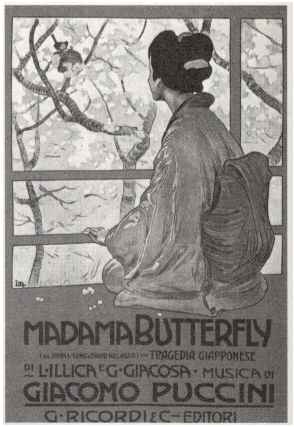
まず、作曲から初演までの流れを簡単に見てみましょう。

１８９９年	・ジョン・ルーサーロングの小説『蝶々夫人』アメリカで発表。
１９００年	・デイヴィッド・ベラスコが小説を基に１幕物に舞台劇化しニューヨークで初演。大ヒットとなる。 ・７月、プッチーニ「トスカ」イギリス初演のために渡英。ロンドンで「蝶々夫人」の舞台を鑑賞し、オペラ化を決意。 ・秋より台本作家イッリカ、ジャコーザと共に１幕物の戯曲をオペラとして２幕物に書き直す検討を行う。 （１幕がアメリカで２幕が日本を舞台とする設定）
１９０１年	・秋、『蝶々夫人』オペラ化権獲得。
１９０２年	・ローマ駐在日本公使夫人「大山久子」より日本の伝統的な音楽について知識を得、日本よりレコード（楽譜？）を送ってもらう。 ・２幕構成を３幕にする事について、リコルディ、ジャコーザと論争。
１９０３年	・２月　自動車事故で大怪我を負い、作曲中断を余儀なくされる。 ・１２月　オペラ『蝶々夫人』完成。 ・妻 エルヴィーラと正式に入籍。 ・小間使いドーリア・マンフレディとの不倫を妻に疑われ、ドーリアが自殺。
１９０４年	・２月１７日　オペラ『蝶々夫人』スカラ座で初演。

プッチーニは、文学作品では無く、その作品が戯曲化された舞台を観てオペラの題材を選ぶことが多かったようです。彼は「舞台化されるのを待って、その後でオペラ化にふさわしいかどうか決めても遅くはない。」とよく言っていたそうです。プッチーニの舞台に対する直感の鋭さ、そして作品選びに対する用心深さを物語っています。

また、プッチーニは台本について非常にこだわりが強く、台本作家と度々論争したことが伝わっています。『蝶々夫人』作曲の際も彼は頑なに２幕構成にこだわり、それが初演の失敗の一因になったと考えられています。また、これは失敗の直接の原因ではないかもしれませんが、作曲の大詰めを迎えた１９０３年に、彼はプライベートでも自動車事故を始め、色々な問題を抱えていたことが分かります。（詳細は、第１回 愛と悲劇の達人「プッチーニ」参照）

２　オペラ「蝶々夫人」初演の様子



初演時のポスター

初演で蝶々さんを演じた「ロジーナ・ストルキオ」

これだけ時間と労力をかけて周到に準備してきたにも関わらず、『蝶々夫人』の初演は惨憺たる結果に終わりました。

第２幕の有名なアリア「ある晴れた日に」は冷たく迎えられ、「手紙の二重唱」では演奏中から大変な野次に見舞われます。タイトルロールのロジーナ・ストルキオは、拍手も貰えず舞台裏で泣き出してしまう始末。

また、第２幕後半、間奏曲が奏され夜明けと共に小鳥の声が聞こえる場面では、聴衆は面白おかしく小鳥や動物の鳴き声を真似たり下品な野次を浴びせたりしました。

翌日の新聞評も、**「このオペラには、《セヴィリアの理髪師》のように復活するであろうと思わせるようなものは何もない。再びこれが上演されるとするならば、聴衆は馬鹿にされたと思うに違いないし、必ずや妨害行為に出るであろう。」**など、否定的な論評ばかり。これまでプッチーニを支援してきたリコルディも、初演後プッチーニに宛てて次のような手紙を送っています。**「今回の公演では、全ての素晴らしい舞台創造における構成を大変期待していた。しかし、見慣れないステージに衣裳、まだそれは良いとしても、例えば、バタフライのお手伝いさんとバタフライが背景にある大きな窓のブラインドを引き上げる時、あれはまるで異常な光景であり滑稽であった。全体にひどいドラマの構成。客席の大騒ぎは当たり前のことだった。軽蔑的な言葉が飛び交った。『蝶々夫人』の初日！イッリカ、ジャコーゾによる台本とプッチーニによる音楽なのに、なぜ？…世界中のカレンダーは２月17日を悲劇的な夜と記すだろう。」**

プッチーニのオペラは、初演時にはあまり良い評価を得られないことが多かったようですが、『蝶々夫人』のできに絶対の自信をもっていた彼にとって、この失敗は大きな痛手となりました。改訂版初演で大成功を収め、その後世界中で絶大な人気を博した後も、彼はスカラ座の聴衆が『蝶々夫人』に示した行為を生涯忘れることはなく、プッチーニの生前にスカラ座で『蝶々夫人』が上演されることはありませんでした。

この初演の失敗は、風変わりな舞台や耳慣れない新しい音楽、長すぎた２幕などが当時の保守的なミラノの聴衆に受け入れられなかったことと、演出のまずさにもあったと言われています。しかし、評論家ジョヴァノーラによると、あの夜、プッチーニの音楽を「ブルジョア音楽」と呼んでいた当時の音楽学生や、プッチーニに反感を持っていた者たちによる妨害工作があったというのです。（いつの世も、人の成功を妬み、足を引っ張ろうとする輩がいるわけです。）もし失敗の原因がプッチーニの作品自体だけにあったとするなら、初演からわずか３ヶ月後の改訂版初演であのような大成功を収めることはできなかったはずです。プッチーニが自信をもっていたように、オペラ『蝶々夫人』は素晴らしい作品だったのです。100年後の今も変わらず世界中で演奏され続けているのがその証拠と言

えるでしょう。

３　「蝶々夫人」公演の未来

プッチーニが亡くなって100年後の今でも、オペラ『蝶々夫人』の人気は衰えず、演奏され続けています。しかしながら、100年前と今とでは世界の社会情勢は大きく変わっています。男女差別やジェンダーに対する考え方も昔とは違い、（必ずしも差別が全くなくなったり昔からの習慣にとらわれることなく生活できたりしているわけではありませんが）今では「蝶々さん」のような境遇の女性はいないはず（？）です。オペラ『蝶々夫人』のこれからが一体どうなるのか、大変興味のあるところです。

最後に、ここ最近に見られるオペラ『蝶々夫人』公演に関する動向や考えを挙げ、この回を閉じたいと思います。

〇公演に対する批判

植民地時代の偏見に基づいたストーリーを未だに演じることへの批判や反論は国内外問わず根強くあり、2007年には、イギリスの音楽教授でプッチーニの専門家、ロジャー・パーカーが人種差別的であるとして批判している。

〇公演に使用する版について

※現在は、プッチーニが1906年のパリ公演のために改訂した第６版が決定版とされている。

・岩田達宗氏（演出家）の視点（鹿児島オペラ協会公演　2023.3.11）

プッチーニの改訂版は作曲家自身による『改ざん』である。プッチーニは東洋を舞台にしながら、初版では正しくも西洋自身の問題に焦点を当てていた。

（これを受けて、評論家の宮沢昭男氏は「日本でも今後、初演版による公演が望まれる。」と記している。）

・星出　豊氏（指揮者・昭和音楽大学教授　知玄社刊「ｼﾞｬｺﾓ･ﾌﾟｯﾁｰﾆ」の著者）

楽譜は日記だ。読ませたくないものを無理に開かせるのは可哀想である。

初演版はリコルディとの約束で破棄されたはずなのに……。

文責：Ｓ．Ｏ

（参考文献）

・南條年章 著　　作曲家　人と作品シリーズ「プッチーニ」　音楽の友社 刊

・星出　豊 著　　「ジャコモ・プッチーニ」　知玄社 刊

・「音楽現代」2024年5月号より

特別企画　没後100年記念「プッチーニのオペラ」《蝶々夫人》　宮沢昭男

芸術現代社 刊